F. W. ストレンジ考

渡　辺　　融*

F. W. Strange: A Missionary of Sport in Japan

by

TOHRU WATANABE

(Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

F. W. Strange was a native of England, who had taught English at the Tokyo English School, the Preparatory School of Tokyo University and the First Upper Middle School from 1875 to 1889, and died in Tokyo on the fifth of July, 1889, He is known as one of the earliest introducers of western sports, such as athletic sports, rowing, etc. in this country, but few historical studies were made on him. It is the present author's point that further studies should be conducted on his works by the Japanese historians on physical education and sport especially in the light of gloval perspective for the development of sport in the last half of the 19th century. This was one of the trials made along this line utilizing official records and documents, newspapers and other first-hand sources and literatures.

Judging from his employment conditions, e. g. terms, salary and teaching subject, he seemed to belong to lower rankings among foreign employee teachers in those days. In contrast with other eminent foreign teachers who were invited and hired by the Japanese government to contribute to specific purposes he seemed to be employed incidentally by the government upon his arrival in Japan. Hence, it might be estimated that the Japanese government did not have any intention to import and promote sport in the Japanese educational system. However, there was a lack of information concerning with his motives to come to Japan and his career experiences while he was in England except he must be a graduate of Oxford University.

During his lifetime in Japan he actively participated in several athletic clubs established by foreign residents settled in Tokyo and Yokohama areas and often played cricket, athletic sports, football, etc. It was mentioned in the sport column of the Japan Weekly Mail that he was a committee member of the Tokyo Athletic Club and the Tokyo Cricket Club and that he was at a high level in such sport skills. Later in his life he successfully managed to hold friendly and/or exhibision games between these clubs and those of Japanese students; thus contributed to the development of student sports in Japan.

As he had been coaching mainly rowing and athletic sports for the students at the University since 1883, he earnestly suggested to the University to have athletic meetings and regatta and realized them. Then, his dedicated students succeeded in establishing the Athletics Association on campus of the Imperial University (formerly, the Tokyo University), which was the first students' sport body established in Japan. The Rules of the Association which was drafted by one of his disciples reflected great influence of the British view of sport he emphasized; that is high evaluaton of character building effect inherent in sport.

It is the present author's contention that the reason why he is now called "Father of Sport" in Japan is due not to his coaching many sports but to his success in the firm establishment of students sport body in the national educational system in Japan with the strong belief in British concept of sport, for, after the first establishment of the Athletic Association at the Imperial University, there successively followed many student sport bodies which contributed to the development of sporting public in Japan. Also, many of the

* 東京大学教養学部体育研究室

foreigners' athletic clubs, which made his contribution more successful, must have served as a stimulus to the development of sport in Japan. [Proceedings of Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 7, 7～22, 1972]

はじめに

"FREDERICK WILLIAM STRANGE OF LONDON ENGLAND, DIED JULY 5 1889 AGED 35, *Faithful unto death*." 青山墓地内外人墓地の一隅にある F. W. ストレンジの墓碑には上記のように文字が刻まれている.

第一高等中学校英語教師イギリス人 F. W. ストレンジの死は明治22年7月5日であった. 都下の一紙は彼の死を次のように報じている. 「第一高等中学校雇教師ストレーンジ氏は一昨日午後二時其の邸に於て死去したり, 氏は一昨年来病に罹り居たれども……中略…… 一昨朝に至り心地勝れずとて学校を休みたるに疾急にすゝみ医薬効なく遂に墓なく最後を遂げたり, 其の原因は心臓麻痺なりという. 氏は今より十五年前即ち氏が二十一歳の時始めて我文部省に雇はれて我国に来り元と大学予備門及び第一高等中学校にて英語学を教授し且生徒の為に戸外遊戯の事に力を尽し其効少からず……後略」。[1]

ストレンジに対する世人の印象はここに示したように, 日本の生徒のために熱心に「戸外遊戯」を教えている外人教師ということであったようで, 例えば彼の死を報じた別の一紙は, 「久しく文部省の雇となりて帝国大学其他学校の躰操教授を担当し居たるストレンヂ氏は……」[2] (下線著者) と書いたほどである. しかし, 彼は英語教師であって, 決して体操教師ではなかったのである.

日本の体育或はスポーツ史の概説書[3] は, 殆んどが彼にある程度の頁を割いている. これらの叙述を要約すると, 1) 漕艇, 陸上競技などの近代スポーツを精神的な面も含めて, 東京大学や同予備門 (後に帝国大学, 第一高等中学校となる) の学生・生徒にはじめて本格的に教えたこと. 2) 上記の学校でボート・レース, 陸上競技会の開催を進言し, これを実現して, それらの運営にすぐれた手腕を示したこと. 3) 日本ではじめての課外スポーツ組織である「帝国大学運動会」の結成に尽力したこと. 以上の3点が彼の日本スポーツ界への貢献とされている. 欧米の近代スポーツの日本への伝来が彼一人に限らず当時の日本の近代学校特に上級学校で教鞭をとったお雇外人教師達や, 日本人留学生達によって広汎に行なわれたことは既に周知のことである. 近代スポーツの母国とされるイギリス人教師が多かった海軍兵学寮 (校), 工部大学校において東京大学, 同予備門よりも早くこれらのスポーツが行なわれていたにもかかわらず, ストレンジの業績が評価されているのは, 上記3点のうちの 2), 3) によるものと考えられる. すなわち帝大のボート・レース及び陸上競技会は明治20年以降年中行事となり世人の人気を呼ぶと共に, これらのスポーツの日本における先導的な役割を果たし, また帝国大学運動会やこれに続いて各学校で生まれた校友会組織は, 日本におけるスポーツの発展の温床となっているからである. このような理由から彼は日本のスポーツの恩人という評価をうけているわけである.

近代スポーツの世界史的な発展の過程から見ると, ストレンジの滞日期間——明治8 (1875) 年から明治22 (1889) 年——は P. マッキントッシュの言う, 「イギリス育ちの各種スポーツの輸出の時代」である.[4] すなわち, 大英帝国の世界的な拡大に伴なって外交官, 植民地行政官, 宣教師, 商人, 軍人, 移住者などによってイギリスのスポーツが世界各地に運ばれた時代である. もちろん, スポーツの場合には政治, 貿易, 軍事のように, それが彼我交流の第一義的な目的となるのではなく, むしろこれらイギリス人の在外生活の娯楽として主としてイギリス人社会の中で行なわれたものであったし, またスポーツの受容の仕方も各国の政治, 経済的な条件や精神的な態度によって異なってはいるが, この時期にイギリスのスポーツの受容が行なわれている. 例えばヤーン以来の体操の伝統をもつドイツにおいては, 1870年代がスポーツの導入の時期とされており,[5] フランスにおいてもこの時期にスポーツ・クラブが生れは

じめ,[6] イギリスのパブリック・スクールの教育が注目されだしている．「イギリスびいき」と言れた人々の中の一人当時20才の若き P. クーベルタンがテーヌの著書に啓発され，イギリスの教育研究の旅に立ったのも1883年のことであった．

このような潮流の中で，特に文明開化のさなかにあった日本で近代スポーツが副次的にもせよ受容されたのは当然すぎるほどの当然であろう．本稿では，このようなスポーツの世界史的な発展の道程をふまえた上で，従来不明な点の多かったストレンジの教師としてまたスポーツの指導者としての活動，当時の在日外人社会におけるスポーツ活動（もちろんアングロサクソン系の外人が中心となっていた）とストレンジとのつながり，この時期における日本側の受容の仕方などについて，出来うる限り明らかにしたいと考えるものである．

ストレンジに関する研究と史料

現在までストレンジに関する研究は殆んどなされていなかったといえよう．これは次のような事情によるものと考えられる．1）彼は高等中学校の語学教師であり，学者でも教育行政家でもなく，他の著名外人の場合に見るような日本近代史上の重要人物でなく研究者の興味をひかなかったこと．2）彼は若くして客死し，彼自身の筆になる著述がきわめて少ないこと．3）従来のスポーツ史に関する著述は試合の記録中心に傾いていたこと．現在ストレンジ個人に関する著作としては，管見の範囲では，木村毅氏の「日本スポーツ文化史」[7] 中の「ストレンジ教授 ―スポーツ界第一の恩人―」なる見出しの10頁あまりのものが最も詳しいようである．同氏は文中で次のように述べている．「私はこのスポーツ史を書きだした最初から，いつかはストレンジ教授のことをかいて，その功績を追慕し，本誌の全読者に認識を新たにしてもらいたいと思っていたのだが，どうも資料が乏しい，今までの諸話をかいたのは座右の書をひるがえしただけで苦もなく書きなぐり，そのために明治新聞文庫まで足を運んだことは五度とはないが，その私もストレンジ教授の資料を集めるだけはほんとうに苦労した。」[8] 同氏は三宅雪嶺の「大学今昔譚」武田千代三郎の「理論実践競技運動」雑誌「少年園」「運動会」,「向陵誌」中の「一高校友会各部々史」堺利彦の「売文集」などを史料としてあげ，ストレンジの事績と人物を紹介し，彼はわが水陸両スポーツ界の恩人であり，野球の父が安部磯雄であるならば，彼は全スポーツの父であるとしている．

上記以外のストレンジ関係史料は，公文書類として彼の勤務校であった東京英語学校，東京大学予備門，第一高等中学校の外国人教師関係文書，文部省への上申書類（現東京大学教養学部所蔵）がある．彼と直接交渉があった人物の彼に関する叙述史料としては，彼の弟子であり最も彼に私淑していた武田千代三郎が，前掲書のほかに雑誌「アスレチックス」第2巻に4回にわたって「本邦運動界の恩人ストレンヂ師を想う」を書いている．武田のこの両著が個人のものとしてはストレンジと当時の東大におけるスポーツに関して最も詳しい，但し武田の場合は自己の立場上やや誇張しているのではないと思われるふしがある．武田と同期生の岸清一の伝記「岸清一伝」や個人の著ではないが，「東京帝国大学漕艇史五十年史」も有力である．

在日外人のスポーツ活動とストレンジとのつながりをうかがうものとしては，当時の日本の外国人経営の英字新聞が有力であって，その代表的なものに Japan Weekly Mail[9] があげられる．

最後にストレンジ自身の筆になるものは，既に著名なスポーツ解説の小冊子 "Outdoor Games" がある．著書はわずかにこれ一点のみであるが，そのほかに上記 Japan Weekly Mail 1887年（明治20）3月12日号に，彼の書簡が紹介されている．これは帝国大学の学生が彼のスポーツへの尽力に対し，感謝状と一対の花瓶とを贈った際のこれに対する彼の礼状である．この書簡が掲載されるに到った経緯は不明であるが，同紙は当時，外人のスポーツのみならず，日本人のスポーツの記事も比較的くわしく掲載し，またストレンジの学校における活躍にも常に注目しており，"Outdoor Games" が出版された時には，これを直ちに "Editorial Note" で紹介し，東京大学や帝国大学の運動会，漕艇会の記事もストレンジの功績を紹介する意味も含めて掲載している．このようなことか

ら上記の書簡も信頼してもよいと考えられる．

以上が本稿をまとめるにあたって利用したおもな史料である．

註

1) 東京日日新聞　5307号明治22年7月7日
2) 毎日新聞　明治22年7月7日
3) 参照した文献は次の通りである．
真行寺朗生・吉原藤助「日本體育史」(1928年)，二宮文右衛門「體育全史」(1934年)，竹之下休蔵「体育五十年」(1956)，今村嘉雄「日本体育史」(1970年)，「十九世紀に於ける日本体育の研究」(1970年)，木下秀明「スポーツの近代日本史」(1970年)
このうち，木下が大学における欧米スポーツの導入が所謂「和魂洋才」型ではなくスポーツの精神の導入にも及んでいたとしていることは注目に価する．
4) McIntosh, P. C.: Sport in Society. 1963, London, C, A, Watts and Co., pp. 80～93
5) 加藤元和：カール・ディーム：人と思想，1972，杏林書院，25，26頁
6) Weber, E: Pierre de Coubertin and the introduction of organized sport in France. Journal of contemporary History Vo. 5. No. 2, 1970, pp. 3～26
7) 木村　毅：日本スポーツ文化史，1956年，洋々社，302～312頁
8) 前掲書：304頁
9) 日本欧字新聞発達史（蛯原八郎著）によれば，Japan Mail は明治3年の創刊で当時，Japrn Gazette, Japan Daily Herald と並んで日本における三大英字新聞で，欧字新聞中最も日本政府よりの態度をとっていた．Weekly Mail はこの週刊版である．以下 J. W. M. と略す．

I. 雇外国人教師ストレンジ

東京英語学校・東大予備門とストレンジ

明治8年（1875）3月22日，イギリス人 F. W. ストレンジは横浜着のイギリス P & O 汽船会社 Orissa 号で来日した．[1] この時彼の年令は20才5～6ケ月という若さであったと思われる．[2]

それから20日後の4月12日には，東京英語学校長肥田昭作から文部大輔田中不二麿宛に彼の雇入れにつき，次のような伺いが出されている．

一，明治八年四月十九日ヨリ
　同　十月十八日迄
　　英人　フレデリック・ウェルレム・ストレンジ
六ケ月　給料　前三ケ月　金百　円
　　後三ケ月　金百廿五円

右者英国「オキスホルド」大学校ニ於テ普通ノ諸学ヲ卒業シ既ニ該校ノ免状モ所持有之教師ノ任ニ堪ユヘキ人物ニ候間当校教諭英人オッカール氏代員トシテ前書ノ給料期限ヲ以テ御雇入ニ相成度此段相伺候也
明治八年四月十二日
　　東京英語学校長　肥田昭作
文部大輔　田中不二麿殿[3]

このようにして彼の日本での教師生活は4月19日からはじまっている．約半年後の10月14日には，彼は「学力優勝ニシテ頗ル授業ニ勉励シ最モ適任ノ者」であるとの理由で，同年10月19日から更に一ケ年間月給金120円を以て雇い継がれており，[4] これ以後明治22年の死に至るまで14年間，毎年向う一ケ年間の雇傭契約が学校ととり交わされている．

彼が奉職した東京英語学校は，前年の明治7年12月東京外国語学校から英語科のみが分離独立したものであって，本来語学専修者の養成を目的とした上等・下等各3年計6年の修業年限を要する学校であった．しかし実際には下等のみを終えて開成学校の専門科へ進学を希望する者が多く，専ら該校の予科的な存在であったようである．校舎は当時，神田一ツ橋の旧榊原邸にあり，明治9年10月現在

校　長	肥田昭作
同心得	服部一三
教　員	日本人24名
	外国人9名（うちイギリス人5名，アメリカ人4名）
生徒数	466名（うち寄宿舎生84名）
歳　入	40,472円15銭
歳　出	32,671円82銭7厘[5]

という規模の学校であった．教員名簿の外国人教師の中には，師範学校教育で著名なアメリカ人 M. M. スコットや，開成学校の H. ウイルソンと並んで，野球の伝来者に名を連らねているアメリカ E. H. 人マジェットの名も見える．

明治10年4月，開成学校が東京大学に改称されること，同校はこれに付属し，東京大学予備門と称し，修業年限4年の純然たる大学予科となっ

て，校舎も隣接する東京大学構内に移っている．その後，医学部予科（明治15年）東京法学校予科，東京外国語学校フランス語科・ドイツ語科（同18年），工科大学予科（同19年）を逐次合併し，明治19年4月には，中学校令にもとずいて第一高等中学校（本科2年，予科3年）となったのである．同校が帝国大学の跡を追ってキャンパスを一ツ橋から本郷向ケ丘に移すのはストレンジの死の直前の明治22年3月であり，ストレンジは14年あまりの教師生活の大部分を一ツ橋時代のこの学校で過したわけである．[6]

これらの学校におけるストレンジの担当教科を，各年度毎の予備門申報から知りうる限り記してみると，

明治10～11年	英語	第3級，第4級
〃 11～12年	同	第4級
〃	数学	第3級
〃 12～13年	英語	第4級
〃 13～14年	同	第3級，第4級

となり．明治11～12年の数学担当を例外として，第3・4級（現在の1・2年生）の英語を担当していたことがわかる．これは，明治15年7月第3級に入学した武田千代三郎が，入学直後最初の授業でストレンジ師から英文法の教授をうけたと述べていることと符合している．[7] 語学教師としてのストレンジは，以上のように初等級をうけもち，武田や堺らの印象では，厳格でどちらかといえば融通のきかない誠実な教師であったと言えるようである．

次に彼の外人教師の中での格付けを推測するためにその俸給を調べてみると，

明治8年4～6月	1ヶ月	100円
同年7月～9年9月	〃	125円
同9年10月～14年9月	〃	150円
同14年10月～19年9月	〃	180円
同19年10月～	〃	200円

となり．

この他に16年11月から新たに設けられた英語学専修科授業を受持ち月20円の手当をうけている．[8]

当時政府雇外人は日本の近代化のため必須の「生きた機械」[9] として，日本人に比し法外な高給で聘せられていたのであって，東京英語学校の場合も先に示した明治9年10月の資料によると，9人の外国人教師の俸給総額が年間 18,000 円となり，日本人教師24人の合計約12,000円をはるかに上まわっている．最高給はスコットの250円で，これに対して校長肥田は150円，同心得服部は100円，日本人教師は2等教諭で85円，5等教諭で30円に過ぎない．

しかし，雇外人教師の中にあって彼は決して高給の方ではない．明治7年の政府雇外国人524人の月給額の分布をみると，800円以上が2人，200～300円が18%，100～200円が35%100円以下が18%とされているので，[10] 彼はむしろ中から中の下にあたるわけである．明治6年9月に頒布された外国人教師雇入条約規則書中には，外国人教師の月給が種別に次のように定められている．

一，小学欧米小学教師　一ヶ月150円以上200円迄
一，文学科教師　一ヶ月200円以上250円迄
一，技術科教師　一ヶ月250円以上300円迄
一，専門学教師　一ヶ月300円以上400円迄
　医科法科理科等ナリ
一，教　　頭　一ヶ月500円以上600円迄
右定限ヲ目的トシテ時々斟酌アリト雖モ必不平均ナキヲ要ス[11]

俸給の面から見ると，彼は外国人教師中で一番下の部類である．これは，彼がわずか20才そこそこであったということと，この規則書中によく用いられている「語学等初学ノ教師」の扱いをうけていたからであると考えられる．

ストレンジの経歴

この点に関しては，現在までの史料では判然としないと言うべきであろう．

武田千代三郎は，明治37年刊の「理論実践競技運動」の冒頭に彼の写真を掲げ，続いて「嗚呼これ実に本邦運動の鼻組『ストレーンヂ』先生の像なり．先生は英国デヴォンシャイア州の人，明治八年四月遙に聘せられて国立東京英語学校の語学教師となる。」と述べ，また，その19年後の大正12年には，「師はデブォンシャイア州の人，姓はストレエンヂ，名はフレデリッキ・ウィリヤム，年18にしてイイトン校を出で，故菊池大麓博士に伴はれ，我国に渡来して大学南校の教師となり，次

いで予備門より高等中学に歴任し……」[12] と述べている.(下線著者)昭和9年刊「體育全史」の二宮も武田に拠ったと思われるが,「明治8年吾が政府に聘せられて……」としている.(下線著者)このほかに出身学校については,ケンブリッヂ大学の出としている文献もある.このように見ると,彼の出身学校は,前掲文書中の 1) オックスフォード,と武田の言う 2) イートン,3) ケンブリッヂの3通りが考えられる.イートン→オックスフォード,イートン→ケンブリッヂというコースは当然あり得ることなので,1) と 2),2) と 3) は必ずしも矛盾しないと思われる.

武田が彼をイートン校の出身と述べているのは武田の立場から考えると彼の口から直接聞いたものと考えられる.ケンブリッヂ説は彼の来日の経緯ともからみ合うが,菊池大麓と彼との関係から出たものと思われる.菊池は,明治3年から10年までの二度目の渡英の際にケンブリッヂ大学のSt.ジョーンズカレッジで学んでおり,帰朝して東京大学理学部教授となっている.スポーツの奨励に対しても積極的であって,明治16年の運動会の際にも審判をつとめ,帝国大学運動会設立直後は幹事長となり,彼が同大学総長(自動的に運動会長もかねる)の任期中に,同会の法人化を実現させている.[13] ストレンジにとっては菊池は強力な援護者であったわけである.このような事実と,武田の言う「菊池に伴なはれて」の一句を考え合わせれば,菊池と彼とのケンブリッヂでの〝めぐりあい〟を推測することも可能でる.しかし「菊池に伴なはれて」には疑問がある.菊池の帰朝は10年4月で,彼の来日はそれよりも2年前だからである.菊池側の史料からも今のところイギリスでの両者の面識をうかがわせるものは出て来ない.したがってケンブリッヂ説は根拠が稀薄であると言わざるを得ない.オックスフォード説は,この章の冒頭に掲げた雇入伺書によるものであるので,この文書の内容について検討してみたい.この文書の要点は,彼が「オキスホルド」大学校の免状を所持していること,雇傭期間,給料が6ケ月間で前3ケ月100円,後3ケ月125円であるということである.当時の外国人教師雇入心得には,「本国ヨリ雇入ルモノハ二ケ年間乃至三ケ年間ヲ約スベシ,我国居留ノ者ヲ雇フ時ハ先ツ15日間乃至1月間ヲ約シ其学術人物ヲ試ミテ後六ケ月或ハ1ケ年以上ノ約アルヘシ」[14]「学科成業証書無之者ヲ学校教師トシテ雇入ルヘカラス　但語学等初学ノ教師ハ時宜ニ因リ証書無之トモ試験ノ上雇入候事苦シカラス」[15] とあり,また本国から雇入れる時には,夫々規定の額の旅費を支弁することも定められている.当時の東京英語学校では外国人教師の移動が激しく,常にその不足を訴えているので,この規定がどこまで厳密に守られていたかは疑問であるが,前記ストレンジの場合の雇入のかたちは,成業証書を所持した,内地居留の外国人の雇入法にあてはまる.これと同校で経歴を知りうる他の外国人教師雇入の場合と比較してみると,M·M·スコットは明治8年3月雇入れで,向う1ケ年間250円という語学教師としては最高の給料で契約している.[16] これはスコットが既に日本で師範学校に奉職しその経験と能力を認められていたからである.E·H·マジェットの場合は,明治8年5月契約であって,彼は同年5月21日まで越前福井学校に奉職しており,開成学校教師ウイズルの保証付きであるとのことで月150円で当初から1ケ年契約を結んでいる.また本国からの雇入れの例はO・M・レーシーの場合に見られる.レーシーは兄F・M・レーシーが先に英語学校で奉職しており,兄の紹介で,アメリカの中学校卒業の免状をも持っているということで,わずか19才であったが旅費200円,給料150円で昭和8年9月から1ケ年間の契約を結んでいる.[17] これらの例とストレンジの場合とを比較すると,ストレンジには旅費の支弁もされておらず,また当初6ケ月契約であり,給料も1年半後になってマジェット,レーシーと肩を並べるという状態であるので,前に述べたように,本国から招聘されたものではなく,来日後雇入を決定し,但し15日乃至30日間の試験期間は免状所持の故を以て設けなかったと考えた方が妥当であろう.

以上を要約すると,学校側に残っている公式の文書と,当時の外国人雇入の一般的な方法とから判断して,ストレンジはオックスフォードの卒業免状を持っていたこと,彼について日本側はその来日まで彼についての予備知識をもっていなかっ

たこと，奉職して1～2年の間に教師として適任であることが認められたことが読みとれるのではないかと考えるのである．

しかし上記のような見解をとったとすれば，来日してわずか20日間でこの雇入契約が成立したことになり，彼の後の事績から見て，双方にとって，また特に日本のスポーツにとって非常に幸運な契約であったといえよう．

またいかにイギリス人が冒険心と自信に満ちていた時代であったとはいえ，名門校を出たばかりの青年を東洋の隅の一小国への旅にかり立てた動機については興味がのこる．

註

1) J. W. M.: Mar. 23 rd 1875.
2) 明治11年の東京大学予備門現員調査表に，同年6月で彼は23才8ケ月と記されているものから逆算した．
3) 東京英語学校，明治8年4月5月上申書．
4) 同　上，明治8年7月より12月まで本省上申書．
5) 第一高等学校六十年史：1939年，第一高等学校，14，15頁．
6) 同　上：30～195頁．
7) 武田千代三郎：本社運動界の恩人ストレエンヂ師を想う(一)，アスレチックス第2巻第2号，1923年，3～5頁．
8) 東京大学予備門：明治16年文部省達・仝伺仝各局往復・諸向往復・外国人関係・決議．
9) 梅渓　昇：お雇い外国人，1965年，日本経済新聞社，232頁．
10) 同　上：224，225頁．
11) 内閣記録局編：法規分類大全，1891年，680頁．
12) 武田千代三郎：前掲文，アスレチックス第2巻第2号，7頁．
13) 東京帝国大学五十年史上冊：1932年，東京帝国大学，673頁．
14) 内閣記録局編：前掲書，679頁．
15) 同　上：680頁．
16) 東京英語学校：自明治7年12月至同8年4月上申簿．
17) 同　上：自8年7月至仝12月本省上申書

II. ストレンジとスポーツ

外国人スポーツクラブ

1858年の安政条約にもとづいて，翌年から横浜，長崎，函館等の開港場にまず外国人居留地が作られた．その後東京，神戸，大阪にも開港，開市場に伴ないこれが設けられていった．これらの地域では居留外人は借家・永代借地権を持ち，日本側の負担で市街地の整備や拡張が行なわれ，外国人の自治機関が設立され，事実上日本の主権が及ばない〝租界〟的な存在であった．

このような居留地は独立国日本にとっては屈辱的な存在ではあったが，日本という地における近代スポーツは，まずこのような居留地でその幕をあけたのである．ここでは早くから居留民の要求によって競馬場，公園，運動場が設けられていた．幕末から明治初年にかけて横浜に住んでいたイギリス人ジャーナリストのJ. R. ブラック(J. R. Black 1827～1880)の著書〝ヤング・ジャパン〟の中には当時の横浜における外人のスポーツについて次のような記述がある．1862年（文久2）に新らしく埋め立てられた沼の居留地に競馬場が設けられて[1] 2日間のレースが行なわれ，1865年（慶応元）頃には横浜射撃協会(Rifle Association)が誕生したが，その頃には他にもう一つスイス人の射撃クラブである「ティール・ナショナル」があった．[2] 1866年（慶応2）の横浜大火ののち，沼地が埋め立てられ，長さ375ヤード，巾285ヤードの運動場が作られた．現在では(明治12年)その一部を横浜クリケット・クラブに貸してある．[3] 1871年（明治4）には，神戸の運動競技・競漕クラブが横浜に来て，陸上と水上における親善試合が行なわれた．[4]

競馬場，競技場建設については横浜市史を，親善試合（彼等はこれを Inter-port match, race と呼んでいる）については Japan Weekly Mail の記録を照合してみると，この記述はほぼ正確なようである．

明治12年(1876)の横浜には次のような外国人のスポーツクラブがあった．[5]

横浜ローイング・クラブ (Y.A.R.C.)　漕艇，水泳

横浜アマチュア・アスレチック・アソシェーション (Y.A.A.A.)　陸上競技

横浜クリケット・クラブ (Y.C.C.)　クリケット

横浜ベースボール・クラブ (Y.B.B.C.)　野球

横浜フットボール・クラブ (Y.F.C.)　フットボール

スイス射撃協会 (S.T.S.)　射撃

横浜ライフル協会 (Y.R.A.)　〃

この他に定かではないがローン・テニスのクラブもあった様子であり，また少し性格は異なるが最も財政規模が大きく春秋に3日間のレースを行なっていたジョッキー・クラブ(競馬)があった．

Japan Weekly Mail はイギリス人編集の新聞だけあって，スポーツの記事を記録・経過説明・批評つきでかなり詳細に掲載している．明治13年(1880)の同紙から，上記の諸クラブを中心にした横浜における一年間の外人のスポーツ行事を追ってみると次のようになる．

まずクリケットの試合が一番多く，5月～7月中旬，9月中旬～11月をシーズンとして，12試合，このうち1試合が海軍及びビジターの連合チームと Y.C.C. の，もう1試合は東京対 Y.C.C. の試合であり，他の10試合はクラブ会員同士の試合である．次に野球はクリケットとほぼ同じシーズンの間に Y.B.B.C. とアメリカ海軍の試合が4回行なわれている．陸上競技会は Y.A.A.A. が5月と11月に一度ずつ，毎年恒例の大会として開催している．Y.A.R.C. は，レガッタの大会を10月に Inter-port race を含めて行ない，(年によっては春にも開かれていた) 8月には水泳の競技会を行なっている．フットボールは11～12月に2試合，射撃のコンテストは年間通して9回開かれている．

上記の諸クラブは，S.T.S. のような特殊なものを除いては，殆んどが主として，イギリス・アリメカといったアングロサクソン系の外国人のクラブであり，年会費 12～2ドル入会金 10～2ドルで会員制をとっていた．[6]

一方東京においても，明治10年 (1877) 以前に築地の外国人を中心とした東京・アスレチック・アソシェーション (T.A.A.A.) があり，同14年 (1881) には東京クリケット・クラブ (T.C.C.) も設立されている．[7] 但し東京の方は，横浜に比し専用の運動場，会員数などの点からみても弱体であったと思われる．

外国人スポーツクラブにおけるストレンジ

さて明治8年に来日したストレンジは，後年スポーツの指導者として秀れた手腕を示しているように，彼自身もスポーツをすることに趣味があったようで，来日の翌9年から上記のようなスポーツ・クラブに積極的に参加している．

彼がスポーツに万能を発揮したことについて武田は次のように述べている．「師は身の丈5尺7，8寸位で外人としては寧ろ小さい方でした．ほっそりした体でしたから体重は先づ17，8貫位でしたろう．イイトン出だけに漕術は手に入ったもので，其の他歩行，水泳，帆走，滑氷，クリケット，フットボウル，トラック・フィルドの諸技何一つとして行くところ可ならざるなき文字通りのオウルランド，アスリイトでした．」[8] 武田は更に運動会の際に見せた彼のハンマー投げの妙技を嘆賞し，また彼はクリケットでは京浜在住外人に推されて，死に至るまでクリケット・クラブのキャプテンを勤めていたとも述べている．

明治9年(1876) 5月築地本願寺前の広場（彼らは Monzeki Parade Ground と呼んでいる．）で T.A.A.A. の春季大会が開催された際，ストレンジはクリケットボール投と1マイルのフラットレースで優勝している．この時彼は，同会の委員会メンバーであり，事務局長をつとめており，[9] これが J.W.M. のスポーツ記事上での彼の名の初出現である．同大会は翌10年10月にも築地海軍兵学寮前の広場で行なわれているが，この時も彼は参加しており，クリケットボール投（3位），ハンマー投（16ポンド，2位），棒高飛（2位），$^1/_4$マイル競走，1マイル競走（2位）と多様な種目に活躍している．[10] さらにこの年（明治10）の6月には彼は東京・アメリカ艦隊の連合チームと Y.B.B.C. の野球試合で東京側の左翼手6番打者として出場している．[11] 純然たるイギリス人の彼が野球のメンバーに加わっているのはいささか奇異の観があり，興味のある問題でもあるが，この点は後に触れる．とにかくこの頃彼は野球に興味をもっていたとみえ，翌年の Y.B.B.C. 対 Y.C.C. のクリケット試合には，Y.B.B.C. 側のメ

ンバーに加わっているのである.[12] J. W. M. 紙上に現われた彼のスポーツ活動は，武田の言の如く多彩であって，明治10年には，上記の他に10月のY. A. R. C. の秋季レガッタ大会の中で行なわれた東京対横浜の対抗レース（舵つきフォア）に東京クルーのバウを漕ぎ,[13] 翌11年11月の Y. F. C. 対東京・艦隊の連合チームのフットボール試合にも出場している.[14]

このように彼は来日当初，東京在住外人クラブの中心としてさまざまなスポーツ活動を行なっていたのであるが，明治12年（1880）以降はさらに，Y. C. C. や Y. A. A. A., Y. A. R. C. にも会員として加わってゆく．この中で最も活動頻度の多いのはクリケットで，J. W. M. によれば，彼は没年までに，20回の試合に出場している．このようなスポーツ・クラブと彼の関係は，やがて東京大学や同予備門のスポーツが開始されると，横浜外人クラブ員の東大，帝大運動会への出場，東大，帝大学生の Y. A. A. A., Y. A. R. C. の競技会への参加の橋渡し役を彼に可能にさせることになる.[15] 武田の言う彼がキャプテンをつとめたクリケット・クラブとはY. C. C. ではなく明治14年に設立された T. C. C.（前出東京クリケット・クラブ）であろう．彼はその設立にあたって，委員会メンバーに推されている.[16]

プレーヤーとしてのストレンジ

以上のように彼のスポーツ活動は，新聞記事に現われた部分のみによっても多彩であったことが知られるのであるが，彼の技術がどの程度であったかを検討してみたい．彼が最も多く行なっているクリケットの記事を拾って見ると，明治13（1880）年11月，東京対横浜の対抗試合に彼は東京から出場している．この試合は東京の勝利に終っている．その戦評の中に，“The bowling of Strange was the best we have seen on the Yokohama Cricket Ground,……” という一節がある.[17] また Y. C. C. ではクラブ内でメンバーを first メンバーと sccond メンバーに分けて試合を行なうことがあり，彼はこの年 first メンバーの方に入っているので，当時の彼はクリケットでは在日イギリス人の中では上の部類であったであろうと推測される．陸上競技会でも彼はしばしばクリケット投にエントリーしているところを見れば，クリケットは彼にとって得意なスポーツであったのであろう．次に漕艇に関しては，彼の名が現れることが少ない，先にあげた東京対横浜の対抗レガッタの記事で（このレースは横浜が2艇身の差が勝っている），「敗れた東京クルーの中ではバウ（ストレンジが漕いだ）と3番がよい漕き手である.」[18] との評をうけている．

また陸上競技においては，先にあげた競技会の例のように，彼はハンマー投，クリケット投の如き投擲種目と1マイル競走に好んで出場している．特に1マイル競走では，明治9年5月の競技会で優勝し（タイム不明），翌年10月の同会では，60ヤードのハンディながら，5分07秒の1位に10ヤードの僅差でやぶれ2位となり，同13年春の Y. A. A. A. の大会では，5分19秒（ハンディ60ヤード）のタイムで優勝している．

こうしてみると彼は概して，当時の在留外人中ではすぐれたプレヤーであったと言えよう．帝大初期の陸上競技会の記録と Y. A. A. A. の競技会の記録を比較してみると（現在と違って各競技会毎に種々の条件差があり厳密な比較とはならないかもしれないが），彼我にかなりの懸隔が認められるので,[19] 在日外人中でも上の部類に属する多彩なストレンジが武田少年に眼には万能のスポーツマンとして映ったのは無理からぬことである．

彼のクリケット・漕艇は，スポーツを見なれた同国人の認めるところであって，このことは武田も指摘しているように，この両種目が最も重んぜられていたイートン校出身説のうらづけともなっているわけである.[20]

最後に前節でちょっと触れた彼と野球との関係について言及しよう．J. W. M. 紙面で見ると，彼は明治12年に Y. C. C. のメンバーとなってからは，野球試合には姿を現わさなくなる．したがって野球を行なっていたのは 9, 10, 11 の3年間ということになる．やはりイギリス人の彼にはクリケットの方が好ましかったに違いない．彼が横浜のクラブへ加わる以前に野球を行なったのは，来日当初の彼の環境によるものと思われる．というのは，明治10年の野球試合の東京側のメンバー中

にレーシー (Lacey), マジェット (Mudgett) の名前が見えるからである.[21] 彼等は何れもアメリカ人で, 当時ストレンジと同じ予備門の雇教師であった. しかもマジェットは先に触れたように野球を日本人生徒に教えたことによって名を遺している人物である. したがって彼等に誘われて野球クラブに入ったと考えるのが妥当であろう. 恐らくスポーツ好きのストレンジは東京では得意なクリケットをする機会を得ないままに同僚の誘いによって類似した野球を行なうに到ったものであろう. 彼がこの数年後に "Outdoor Games" を著わした際, スポルディングのガイドブックに拠って Baseball の解説を行ない, これに Cricket 以上の頁をさいたこととあわせて,[22] 彼のスポーツに対する巾広い態度に注目したい.

註

1) Black, J. R.: Young Japan, 1880, London, Trubner & Co. 邦訳ねずまさし・小池晴子, 1970年, 平凡社, 第1巻76頁.
2) 同　上: 第2巻65頁.
3) 同　上: 第2巻90頁.
4) 同　上: 第3巻159頁.
5) J. W. M.: Apr. 19th. 1879 およびこの年の J. W. M. 紙面に登場してくるクラブを全部列挙した.
6) 同　上
7) 同　上: Feb. 5th. 1881.
8) 武田千代三郎: 前掲文, アスレチックス第2巻第2号, 8頁.
9) J. W. M.: May 20th 1876.
10) 同　上: Oct. 12nd 1877.
11) 同　上: Jun. 5th 1877.
12) 同　上: Oct. 12nd 1877.
13) 10) と同じ.
14) J. W. M.: Dec. 7th 1878.
15) ボートでは明治18年11月に東大クルーが初めて参加し, Y. A. R. C. のクルーは帝国大学第一回競漕会(明治20年4月) に招待出場している. 陸上競技でも明治19年春の帝大陸上運動会に Y. C. A. C. が招待されている.
16) 7) と同じ.
17) J. W. M.: Nov. 6th 1880.
18) 10) と同じ.
19) J. W. M. の記事によって明治20年の帝大陸上運動会の一位の記録と, 明治10, 12, 13年の Y. A. A. A., T. A. A. A. の大会の一位の記録とを比較してみると, 特に投擲種目の差が甚だしい.
20) Roport of Public School Commission I: 1864, p. 97 でイートン校の Major sports はボート, クリケットの順になっている.
21) 11) と同じ.
22) クリケットには7頁, ベースボールに10頁をさいている.

III. スポーツの伝道者ストレンジ

東京大学, 同予備門と体操

東京大学及び同予備門の第1回陸上運動会は, 明治16年 (1883) 6月16日に行なわれている. 武田の言では, これに先だってストレンジは6月9日にスポーツに関する講演を行ない,[1] また彼の著 "Outdoor Games" の発行は, この間の6月11日である. 東京大学走舸組第1回競漕会は翌17年10月17日に行なわれ,[2] 帝国大学運動会の創立は同19年7月である.[3] このように彼が日本のスポーツに関し尽力したと言われている事績は, 明治16年以降すなわち彼の来日から9年目以降のできごとである. 多くの人が指摘するように, このちスポーツを熱心に指導した彼に, 明治15年以前には全くこの種の記録が見られないことは, もしそれが事実とすれば奇異なことである.

そこで, この時期の東京英語学校, 東大予備門, 東京大学における体育の状況や, 学校側のこれに対する姿勢について, 正課の体操の取り扱いを中心に概観してみたい.

東京英語学校は, 明治6年4月28日の「学制2編追加」に定められた外国語学校にあたり, 制度的には下等4級から上等1級にいたるまで「体操」が課せられていた.[4] 同校明治9年5月1日～10月21日の日課表では, 午後12時30分から1時30分までの1時間が体操にあてられており,[5] その前年の11月の現員調査には, 苅谷祐三, 滝野貞豊2名の体操教員の名が見え, この両名は開成学校と協議の上1日金50銭の日当で雇うことになり, この日当を両校で25銭ずつ分与することになったと記されている.[6] 両校は上記2名の日雇の教員によって体操指導を行なっていたのであろう.

同10年4月以降, 東京大学は高尚な諸学を教える専門科の学校であるとして教科中に体操が設けられていない. 予備門の方は, 教育令発令直後の同12年10月に学科課程に変更があって, 作文が奨励され併せて正課の余暇に体操科が採用されてい

る．しかしこの時には未だ学校に設備がなかったので，前年に発足した体操伝習所において寄宿舎生のみに限り毎日午後教練をうけさせており，将来全生徒に及ぼすことを期している．[7] これは伝習所側のリーランドの体操指導の記録とも一致する．[8] こえて翌年2月には，これに加えて通学生を50人に限って同様の体操教練をうけさせている．

中学校，師範学校の教則大綱が定められたのは，同14年7月である．この時予備門にも修身学，簿記法の二科を増設し，さらに体操科も正式の課程に加えるべきことが通達されている．体操は「適宜定ムベキ」ものであったが，予備門側はこれに対し，たとえ適宜であっても，学校，生徒の事情で一般には課し得ないことを上申している．その事情とは，1）諸課業が毎日大抵午前8時から午後3時まであって，体操に配付すべき時間が殆んどないこと，2）午後3時以降に設けようとしても，生徒の多くは通学生であって府下の遠方から徒歩通学しているので，秋冬には帰宅がおそくなり翌日の予習にさしつかえること，3）通学生は上記のように遠路の徒歩通学であるから，それだけで充分運動になっていて，必ずしも体操を要しない，というものであった．そして，体操を正課に加え全生徒に課することは却って有害であるから従来通り寄宿舎生は必修，通学生は随意としたいと願出て認められている．[9]

体操を伝習所規則通り一週間軽運動2時間，歩兵操練2時間ずつとして全員に課すことになるのは，制度的には同17年（1885）3月からである．[10] しかしこのうち歩兵操練に関しては，明治19年3月に，「初めて生徒に歩兵操練を課す……」[11]という記録があり，17年3月の実質は疑がわしい．

当時の予備門の教育については，二人の息子（長男一太郎と次男捨次郎）を同校に入学させた福沢諭吉によって次のように指摘されている．「両人を帝国大学の予備門に入れて修学させていたところがとかく胃が悪くなる．ソレカラ宅に呼び返していろいろ手当すると次第によくなる．よくなるから入れるとまた悪くなる．とうとう三度入れて三度失敗した．」[12] 彼はさらに，そこで教科課程の改正を文部大輔田中不二麿に進言したが改まらず，遂に息子を自塾に移しアメリカの大学に留学させたと述べ，文部学校の教育法をこのままやっていけば，生徒を殺すか廃人にするだろうと極言し，体育を先にすべしとして結んでいる．

このような状況は当時の日本の学校全般について言えたようで，J. W. M. 1879年（明治12）3月22日の第1面に“Education in Japan”なる論説が掲載され，日本の教育の大きな欠陥の一つは，Physical Education の欠落であり，現在の日本の学校にはイギリス人の眼から見て運動場と呼ぶに価する設備を備えたものは殆んどない，これでは将来有用な人物は育たないと言い，イギリス人らしくスポーツの効用を説いている．

以上のように明治10年代前半の予備門・東京大学においては，文字通り日本の将来を担う知的エリートに対して，知識教育を施すのに精一杯であって，他を顧みる余裕に乏しかったのであろう．14年10月の上申書の内容が卒直にこのような事情を物語っていると考えられる．文部省の方針をうけいれて予備門の課程に体操を徐々に組み込んでいった10年代後半においてストレンジに活躍の場が開かれていったのは，上記のような事情と無関係ではないであろう．

東京大学第一回陸上運動会

上記の状況下で明治16年6月16日に学校の主催による陸上運動会が開かれたのであった．学生側は，武田の表現によれば「学校当局に，如何なる評議があったか知りませんが，愈々明治16年6月というに突如として……」[13]（下線著者）という受けとり方をしている．その前年7月入学の武田の回顧では，当時の学生の健康のための運動として，帆走，遠足，撃剣に柔術（町道場で行なう），夏休みの徒歩旅行，高山の跋渉があげられており，[14] 明治初年から各学校に伝えられていた筈のスポーツは予備門では断続的であって定着するに到らなかったとみえ，この頃の武田の記憶には残っていない．後節にふれるボート遊びのみが継続的に行なわれていたようである．

学校による陸上競技会の試みは，すでにこれ以前海軍兵学寮や札幌農学校でも行なわれているが，日本人にとって決して身近なものではなかっ

た．その開催にはかなりの準備が必要であったであろう．予備門においても，これは例外ではなかった，開催前の事情は，先に引用した武田の文中に詳しく表わされている．これによると，明治16年5月にはいって近々中に運動会の開催の噂が立ち，やがて日どりやプログラムが決定し，放課後は，ストレンジ自ら調達してきた用具と，彼の指導のもとに練習で校庭が賑わった，また，会日の前週の土曜日（6月9日）には，大学総理の依頼で彼が職員，生徒一同に対して運動に関する演説を行なうことになり，講演当日には加藤弘之総理も出席し，ストレンジは夫人（彼は明治14年12月Edith, D. Sandford と結婚している．）[15] 同伴で現われたという．こうしてみると，学校側はこの会の開催にあたってかなり積極的であったと思われる．

“Outdoor Games”の発行が運動会の5日前の6月11日であることも，このような脈絡の中で理解すべきであろう．この内容を一瞥して意外に思われることは，すべてが陸上における outdoor game の解説であって，彼がこののち最も熱心に指導した漕艇については一言もふれていないことである．この点も，彼の事績と対照して，この書が数日後に予定されている運動会を十分念頭においた上での著述であると思われる所以である．

彼はこの書の中に，Rounders, Steeple Chase, Hockey, Football（サッカー），Lawn Tennis, Cricket, 及び Athletic Sports の各種目などを盛り込んでいる．[16] 陸上競技種目中には，100～880ヤードの競走4種目，ハードルレース，走高，三段，棒高，走幅の跳躍4種目，砲丸，ハンマー，クリケット投の投擲3種目，その他に二人三脚と敗者慰め競走 (Consolation race) を加えている．これらはやがて東大運動会で行なわれる種目であり，また当時 Y. A. A. A. や T. A. A. A. で常に行なわれていた種目でもある．そして末尾に陸上競技の練習法，競技会の規則の項を設けている．陸上競技以外の種目では練習法の項は設けられていない．彼は上記のようなイギリス育ちのスポーツ種目以外にベースボールの項を設け，しかもこれに10頁という全篇を通じて最高の紙数を割いている．この部分の叙述のために，彼は Spalding's Baseball Guide[17] によったとしているが，その最新版を用いたようで，投球距離50フィート，悪球出塁7球制のルールは，この書の前々年の1881年から大リーグで採用されていたものである．[18] 彼がこのように「アメリカのナショナルゲーム」としているベースボールの記述に意を用いているのは，前章で述べたように彼のスポーツに対する巾広い姿勢を物語るとともに，当時すでに活動していたと思われる平岡凞のベースボールクラブによって代表される日本人の野球への関心が彼の眼にも映じた結果によるものであろう．

以上のように明治16年の運動会の開催にあたっては，その準備にかなり努力が払われたことが認められる．会当日にはストレンジは自ら審判をつとめ，この他に日本人では服部一三（当時予備門幹事が）スターターを，菊池大麓（当時理学部長）が参謀長格で全般の指揮にあたっている．この二人が日本人の中では彼の最もよき後援者であり，協力者でもあったようである．服部は，後年ボートや陸上競技などの先駆者としてストレンジの名をあげ，彼を外人教師の中で最も印象深い一人としている．[19] したがって，この運動会に関する彼のリーダーシップは認めてよく，学校がこれをうけて開催にふみきったと考えられる．

走舸組とストレンジ

陸上運動会の開催が，学生にとって「突如」であったのに対して，翌17年10月の走舸組競漕会は，むしろ学生間で継続的に行なわれていたボート遊びがレガッタに組織されたという経路を辿っている．いわば自生的なスポーツ発展の過程をふんだといえるのである．

東京帝国大学漕艇部五十年史によって簡単にその経過を追ってみると，隅田川や神田川でのボート遊びは，すでに明治10年前後から学生の間で行なわれており，16年頃には，いくつかの学生のボートクラブがあった．しかし大学所有のボートは僅か2隻に過ぎなかったのでボート貸付の統制をはかるために，これらクラブの統轄団体として走舸組なる組織が設立された．これが明治16．17年の交の頃と思われる．この走舸組が中心となって新艇建造の募金を行ない，17年秋，新艇の竣工を

まって走舸組競漕会開催という運びになってゆくのである．ストレンジは，募金に5円という大金を寄付し，且つ新艇の建造について助言をしたという．[20] 当時学生であった島田剛太郎（明治23年大学卒業）が，ストレンジは明治16年までは横浜でボートを漕いでいてボートに関して学生と交渉はなかったと言っているので，彼の走舸組とのつながりは，この新艇建造を契機にしてうまれたと考えられる．

走舸組競漕会は，大学総理加藤弘之を会長とし，首事に服部一三，穂積陳重，矢田部良吉，外山正一，杉浦重剛など大学の主脳部が名を連らねているので，[21] これも陸上運動会の場合と同じく，大学のバックアップがあったと考えてよいであろう．ストレンジは例によって審判をつとめ，会の最終レースとして行なわれた選抜クルーの模範レースで舵手をもつとめている．この競漕会が，前節の陸上運動会とともに，帝国大学運動会創立後の春秋の恒例行事の先駆となったことは前にも述べた通りである．

武田千代三郎，山口鋭之助[22]ら後年ストレンジに関し最も多くを語っている人々が走舸組に属していたことを考えると，走舸組は彼にとって最も交渉の深い学生グループであったであろう．明治18年11月3日の Y. A. R. C. 秋季レガッタに東京大学のクルーが初めて参加し，その代表クルーと1マイルレースを行なっている．結果は大差で東大が敗れている．この時の J. W. M. の評は東大クルーが川でのみ練習しラフウォーターになれていないので大敗したが，フォームもよく，統一もとれているから，静水コースでレースをすればクラブのよき相手となるであろうと同情的な書き方をしている．[23] 武田，山口の言によれば，このレースはストレンジの斡旋になるものであって，大会前の9月頃から彼の滑席艇を用い，彼自身も連日隅田川に通って東大クルー5人の練習のコーチをしたということである．この時の5人は，阪倉銀之助，神崎東蔵，武田千代三郎，山口鋭之助，日高真実で，[24] 走舸組の最も熱心なメンバーであり，且つ翌年9月帝国大学運動会創立の際の活動的なメンバーでもあった．

史料紹介の部分で述べた彼の書簡は，このような走舸組の学生と彼とのつながりを如実に物語るものであろう．

J. W. M. 1887年（明治20）3月12日のこの記事には，走舸組がストレンジに感謝状を呈し，花瓶を贈ったことが紹介されている．感謝状は部分的に引用され，これに対するストレンジの礼状は殆んど全文と思われるものが掲載されている．感謝状の趣旨は，会の創立，ボートの建造，競漕会の開催と成功，そしてそれがもたらした走舸組の学内における栄光など多くにわたる彼の熱心な尽力を謝し，彼をその育ての親としているものである．この明治20年3月という時点は，その前年4月に東京大学が帝国大学に，同予備門が第一高等中学校になり，7月に帝国大学運動会が前記走舸組主要メンバーの活躍で創立され，運動会規約によって，[25] 翌4月には第1回帝国大学運動会競漕会が春の恒例行事として開かれようとしている時であって，いわば彼の提唱と直弟子達の活躍により，日本ではじめて学生のスポーツ組織が開花する直前にあたっていたわけである．それだけに走舸組の側から言えば，この行為は組の発展的解散を機に一まず恩人の労に報いる意図をもっていたものといえよう．一方ストレンジにとっても自己の数年間の努力の結果，大学が正式にスポーツを教育のプログラムに組み入れたことでもあり，また彼の努力が最も親しい学生グループに認められたことで，「スポーツの伝道」に一段落をつけた思いであったであろう．

彼は感謝状中に学生達が自分達の志を受け取って欲しいと言っているのに対して，書簡の冒頭でまず「頂戴致せし花瓶一対に対して謝意を申し上ぐべきこと，固より容易なることには御座無く候えども，其のこと限りにては別に至難の業とも存じ申さず候」と言い，続いて faithful の語にふさわしい言葉で礼を述べ，「彼の品は生が功業の証に非ずして，貴邦最古最強なる漕艇会走舸組会友が謝意，雅量，友誼の不朽の証たるべしと存じ候間，生が死後二児[26]にこれを遺贈するを得たること恐悦至極と存じ候」という受けとめ方をして異郷で得た友情に喜びをあらわし，また感謝状に対しても，「生が感謝の念は到底筆舌に尽すべきものにてはこれなく候」と心の贈物に対する最高の感

謝を示している．続いて自己の足跡について「生もし貴会の為に致す処寸毫もなしと申上げ候はば，却って要らざる謙抑の辞たるの譏りも免がれ難しと存上げ候，寧ろ聊か微力を致す処これ有りと申得べきこと生が終生の誉れと自負致し居り候」と控えめながら確信に満ちており，同時に「固より生の致す処微小なりとは存じ候え共，その招来せし成果たるや甚だ偉大なるものこれ有りと存じ上げ候」と走舸組の学生達の努力と会の繁栄を賞めたたえている．そして最後に「爾今貴邦世上如何なる革命これ有り候とも，最早吾が英国の遊戯，就中漕艇を駆逐すること能はざるべしと存じ候」とイギリス人として母国のスポーツの「伝道」の成功に対しては誇りと満足を意をあらわしている．

この書簡にあらわれたストレンジは，走舸組会員の友情に対しては，faithful の形容にふさわしく謙虚で誠実さにあふれており，一方日本のスポーツに果たした自己の役割には自信をもち，また母国のスポーツの価値には十分な誇りと確信に満ちている．日本における後半生の意義をスポーツの指導に見出したかのように見えるこの態度は，まさに「スポーツの伝道者」と呼ぶにふさわしいと言えよう．

帝国大学運動会

前に述べたように，帝国大学運動会は，ストレンジの直弟子で走舸組の日高真実らの活躍によるものであった．同会規則も日高の筆になるとされている．この規則によれば同会の目的は，身心を鍛錬し，又相互の親睦を謀ることであり，[27] 大学当局も趣旨に賛成し毎年若干の補助金を支出することになっていた．当時委員をつとめていた菊池大麓が後年解説したところによれば，「此条に心と云ふ言葉を入れたのは余程意味がある。」とし，まず運動会組織が自治の訓練の場であること，また運動の意義はイギリスの例のように，気象を養成する（人格陶冶）有力な手段であるとし，イギリスの繁栄はこの気象によるところ大であると指摘している．この後，このような組織が続々と各学校に設けられるが，[28] 教育へのスポーツの導入が上記のようなスポーツ観を出発点としていたことは無視しえない．“Outdoor Games”中に見るストレンジの考え方は一般的な身体運動が健康を保つ上に必要であるという程度で，[29] 特にイギリス的なスポーツ観を明らかにはしていない．しかし武田は，彼が6月9日の講演で「運動は人の獣力のみを練るを目的とせず，吾人の智徳を磨かんが為なり，運動は手段にして目的に非ず，期する所これ以上にあり．運動場における訓育の遙に教室内における教化に勝れるものあればなり，……」と言ったとしており，また「理論実践競技運動」中でも，彼の言としてスポーツにおいてはベストを尽すこと，よき敗者になるような情意の鍛錬をすることが奥義であるとしている．また菊池も上記の講演中でたまたまストレンジに言及し，彼が競漕会の度に敗者がローアウトしないことを最も気にしていたと述べている．このように見ると，彼は一般的身体運動については身体面，健康面への効用を認めるが，彼が母国で身につけたスポーツは彼にとってイギリス的なスポーツ観と切りはなせないものとしていたと考えられる．そしてイギリス人らしく後者の教育上の必要性を当時の日本にも認めて彼の「伝道」活動を推進していたのであろう．

もちろんスポーツの学校への定着とともにこのようなスポーツ観も定着したと考えるのは早計であって，むしろスポーツの定着，対抗試合の発達とともに日本的なスポーツ観が育っていったことはすでに指摘されていることであり，特にその代表的な存在が彼が嘗て在職した第一高等中学校であったということは明記しておかねばなるまい．

註

1) 武田千代三郎：前掲文（二），アスレチックス第2巻第3号124頁．
2) 東京帝国大学漕艇部五十年史：1936年，東京帝国大学漕艇部，10頁．
3) 東京帝国大学五十年史上冊：667頁．
4) 井上一男：学校体育制度史，1959年，大修館書店，4頁．
5) 東京英語学校　上申書上下合冊従明治9年1月至同12月．
6) 同　上　本省上申書自明治8年7月至同12月．
7) 第一高等学校六十年史：39頁．
8) 今村嘉雄：学校体育の父リーランド博士，昭和43

年，不昧堂，52頁.
9) 第一高等学校六十年史： 61頁.
10) 同 上 ： 78頁.
11) 同 上 ： 91頁.
12) 福翁自伝： 角川文庫，大内兵衛解題，昆野和七校訂，1967年，283～285頁.
13) 武田千代三郎： 前掲文（一），前掲書第 2 巻第 2 号，12頁.
14) 同 上 ： 11頁.
15) J. W. M.： Jan. 7th 1882.
16) なおこのほかに，Prisoner's Base, Warning, Touch, Follow my Leader, Hare and Hounds, Leap Frog, Fly the Garter, French and English, Buck ! Buck !, Catch Ball などをいれている.
17) "Outdoor Games" の序文で参考文献として，"The Boy's Own Book" "Every Boy's Book" と "Spalding's Baseball Guide" をあげている.
18) 拙著： スポーツ技術の発展とルール，体育科教育第20巻第12号，1972年，14頁.
19) 第一高等学校同窓会報： 第 5 号，1927年，10～13頁.
20) 東京帝国大学漕艇部五十年史： 4 ～10頁.
21) 同 上 ： 11頁.
22) 山口鋭之助は，明治17年に東京大学を卒業しているが引き続いて研究生として大学に残っていた． 漕艇部五十年史巻末の座談会で， ストレンジに関して語っている.
23) J. W. M.： Nov. 7th 1885.
24) 23) の記事にある東大クルーと，漕艇部五十年史で山口があげているクルー 5 人の名が一致する． この中の日高真実は教育学を専攻しドイツに留学したが，帰朝後明治27年に早逝している． 彼は最初の帝国大学運動会規則の起草者とされている.
25) 東京帝国大学五十年史上冊： 1030頁.
26) 武田は， ストレンジには二児があり彼が急死した時， 長男ベエリイは 6 才， 長女ノンニイは 4 才であったと言っている．女児の誕生（1884年 8 月10日）は J. W. M. で確かめられたが， 男児の方は発見できなかった.
27) 東京帝国大学五十年史上冊： 667頁.
学士会月報： 128号， 1898年10月， 27～40頁に菊池大麓の「東京帝国大学運動会協議会ニ於ケル演説」が掲載されている． この演説は運動会初期の事情を知る上で，有力な史料である.
28) 木下秀明： スポーツの近代日本史：1970年，杏林書院，23，24頁.
29) Strange, F. W.： Outdoor Games, 1883, Tokyo, Maruya & Co. Ⅰ～Ⅲ.

結　　び

ストレンジは明治22年 7 月 5 日に東京の自宅で急死した．死因に関して種々の憶測が出るほど突然の死であったようで，武田は当時彼が身体を悪くしていたことを知っていたがその武田も驚いたほどである.

第一高等中学校は，彼が生前授業に精励したことで 300 円，課外の教育に尽力したことで 200 円合計 500 円を遺族に贈って彼の労をねぎらっている．記念碑建立の提案は死の直後を含めて何回かもち上っているが，遂に果たされていない.

第一章で述べたように現段階では，彼は日本政府に招聘されたのではなく，彼の東京英語学校への就職はむしろ偶然であったと見るのが妥当と思われる．しかし彼自身のスポーツに対する情熱，技術が後年スポーツ指導を可能にし，その上彼が抱いていた当時のイギリスのパブリックスクール的なスポーツ観，すなわち，スポーツが性格陶冶に果す役割を重視する考え方が，学校教育にスポーツを植付けることを可能にしたと言えるであろう．このような点では彼はスポーツ発達の時流に棹さしていたと考えられる．外人スポーツクラブは日本のスポーツ界の一種の刺激剤的な役割を果たしており，この立場は彼の死後も，例えば一高の野球に見るように，ますます重要になる．彼はその糸口をつけたわけである．一方受容する日本人の側を考えてみると，菊池大麓の場合に見られるように，当時の大国イギリスのエリート教育に対する憧憬乃至模倣の意識が働らいていたようである．また似て非なる武術による精神教育の伝統が，型の上でこれを受け入れ易くしたことは否めない．明治30年以降，スポーツマンシップと武士道の置換が行われるのはその一つの例証であろう.

明治の前半期にスポーツを日本に伝えた外国人は彼のほかにも数多く存在するが，彼が特に〝スポーツの恩人〟と呼ばれる理由はこのような点にあろう.

参 考 文 献

東京帝国大学編，東京帝国大学五十年史，1932年.
東京帝国大学漕艇部編，東京帝国大学漕艇部五十年史，1936年.
第一高等学校編，第一高等学校六十年史，1939年.
第一高等学校寄宿寮編，向稜誌，1913年.
文部省編，学制八十年史，1954年.
横浜市役所編，横浜市史稿，1932年.
横浜市編，横浜市史，1958年.
内閣記録局編，法規分類大全，1891年.

石井研堂，増補改訂明治事物起源，明治文化全集別巻，明治文化研究会，1969年.
今村嘉雄，十九世紀に於ける日本体育の研究，不昧堂，1968年.
同， 日本体育史，不昧堂，1970年.
同， 学校体育の父リーランド博士，不昧堂，1968年.
梅渓昇，お雇い外国人：明治日本の脇役たち，日本経済新聞社，1970年.
同， お雇い外国人：概説篇， 鹿島研究所出版会，1968年.
大町桂月・猪狩史山，杉浦重剛先生，政教社，1924年.
同， 中野刀水，杉浦重剛先生座談録，岩波書店（文庫本），1941年，
加藤元和，カール・ディーム一人と思想一，杏林書院，1972年.
木下秀明，スポーツの近代日本史，杏林書院，1970年.
同， 日本体育史研究序説，不昧堂，1971年.
君島一郎，日本野球創世記，ベースボールマガジン社，1973年.
木村 毅，日本スポーツ文化史，洋々社，1956年.
真行寺朗生・吉原藤助，日本體育史，日本體育学会，1928年.
蛯原八郎，日本欧字新聞雑誌史，1934年.
小野秀雄，日本新聞発達史，1922年.
岸同門会編，岸清一伝，1939年.
田所美治，菊池前文相演述九十九集，1903年.
竹之下休蔵，体育五十年，時事通信社，1956年.
土屋忠雄，明治前期教育政策史の研究，講談社，1962年.
二宮文右衛門，體育全史，1934年.
宮坂哲文，課外教育史，教育文化史大系 Ⅰ，金子書房，1953年.
武田千代三郎，理論実践競技運動，博文館，1904年.
木村毅編，明治文化資料叢書スポーツ篇，
福翁自伝，新訂版，角川書店（文庫本）1967年.
木村吉次，明治時代における運動の価値論の一考察〔Ⅰ〕，〔Ⅱ〕，〔Ⅲ〕体育学研究第5巻第2，3，4号 9～14頁，63～76頁，107～115頁，1961年.
武田千代三郎，本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想う，アスレチックス第2巻第2，3，4，5号，1923年.
Black, J. R., Young Japan, Trubner Co., 1880 邦訳ねずまさし・小池晴子，平凡社，1970年.
McIntosh, P. C., Sport in Society, Watts & Co. 1963, 邦訳飯塚，石川，竹田，不昧堂，1970.
Clarendon, Commission, Report of Public School Commission, 1864.
Weber, E., Pierre de Conbertin and the introduction of organised sport in France, Journal of Contemporary History Vol. 5 No. 2, 1970, p.p 3～26.
The Japan Weely Mail, 1875～1889.